

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月氏の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

『顕浄土真実教行証文類序』（聖典一五〇頁）

遇いがたくして今、
聞きがたくして今

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishi

今年8月の「同朋新聞」に砺波の庄太郎の名があった。この3月に御修復となったが、幕末に消失した両堂の建立に心血を注いだ棟梁の一人が、富山県砺波に住む庄太郎である。両堂再建後も、砺波詰所の宿主として、本山に参拝に来られるご門徒と共に聞法し、そのお世話をしながら、砺波詰所で一生を送られたので、多くの方から「砺波の庄太郎さん」と慕われた方である。今、砺波詰所の廊下には、庄太郎の語録が掲載されてある。これは、私が感動を覚えた言葉の一つである。

あなたがた、決して我が家に御内仏があるとか、我が家に仏さまを安置すると思うてはなりません。我が家と思うところに間違いがある。仏さまの家に、私が住まわせて頂くと思いなさい。

私もお寺で生まれ、お寺で生きてきたと思ってきたが、とんでもない間違いであった。今にして思う。仏さまの家に生まれ、出会った多くのご門徒の眼差しを通して、如来の智慧と慈悲に包まれ育てられてきた身であったことを。

私ほどの果報者はありません。こんな罪悪深重の身に、地獄一定の身に、お念仏さまが頂けましたこと、こんなにも有難く勿体ないことはありません。

ん。

今年、94才になる札幌在住のFというおばあさんのいつもの言葉である。貧しい農家の多くの兄弟の一人として誕生したが、子供の頃から祖母と共に、近隣のお寺のお座に通い、嫁ぐことがあったら、どんなに貧しくても門徒の家に嫁ぎたいと娘の時から願っていたという。フランス人の女性と結婚した孫が、その1年後に急逝するという悲しみにも出会いながら、そこからあらためて教えを聞いてこられた。そのフランスのお嫁さんもFさんの後姿から念仏申す人となられた。

「宿業を果たすをもって 身の喜びとし 祖聖と同朋一如の浄土を期せん」

母の実家のお寺に安置されている長兄の写真の側に安置されている遺書である。大谷大学の在学中に学徒出陣、そして、シベリア抑留によって二十一才で亡くなった長兄の遺言である。

どのような厳しく不安な時代や社会的状況、そして、深刻で辛い業縁の身であらうとも、どこでこの私が、「人身受け難し。私が人間に生まれてきてよかったと言えるのか、恵まれた人生であったと言えるのか」。それは、今生において、聞き難き仏法を聞くことができた、遇い難き本願に出遇うことができた、そのこと以外にはないのであろう。

釈尊誕生の折、祝福に訪れた阿私陀仙人は、皇子を見るなり、大粒の涙を流した。「なぜ泣くのか」と問うた父の浄飯王に対して、「この皇子はやがて、この世の苦悩の人々を救う導師、法王になられる方である。しかし、皇子の教えを聞く前に、私の命は尽きてしまうであろう。そして、尽きることがない迷いと流転を重ねていくのかと思うと、こんな悲しいことはない」と、答えたと仏伝は伝えている。

釈尊出世の意義、宗祖出世の意義、その教えを身をもって証しされた方々を思う時、私自身人間に生まれて、本当に恵まれた世に生まれたことの喜びを感じず。それは、いつの世にあっても。